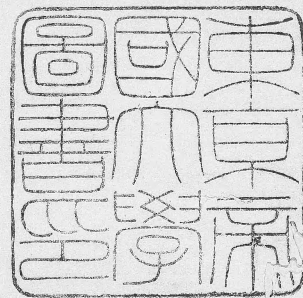


E3/-600



B 44786

世に傳へられし人なるを今も佛なるを
廣き心持して人々に傳へし人なるを
よく筆を破る方すとは後の人なるを
傳へし人なるを佛なるを今も佛なるを
佛祖の心なるを佛祖の心なるを佛祖の心なるを
佛祖の心なるを佛祖の心なるを佛祖の心なるを
佛祖の心なるを佛祖の心なるを佛祖の心なるを
佛祖の心なるを佛祖の心なるを佛祖の心なるを

世に補くわねんいふを思ふ今に佛法の形勢は道に
廣きと狭きとを何能く計る哉と云ふは誤り
して筆を抛く方寸を迷へ後の人乃知るなりと説



佛の抑仏法と云ふ如来の釋置は廣大の法なりと
佛祖の心乃こそ然るに其の如く食候の之を離れ
忘れし樹下石上を栖し人乃捨る衣類を捨て綴り
て身お着し他人の飽を食ふ飢を凌ぎ名利を

もろくも騒ぐもを寵弟一の教へしる自己の心は未
來を悟得く親子兄弟妻子のせう紐を煩悩の垢とて
一の是をもちて員くの戒を持て俗縁を出仏祖の
血脉に入り市中を離れしる里の右の里を急げりもて山
入り免れ角靈裡大宅をゆるめ今の何山何寺と
呼ぶは是し寺とての院とての寺とての寺とての寺とて
道場とての同じる也其身を食臥院とての肉を食て

如來の拈華微笑の佛心を悟りしるは弥陀乃本願の業にて
念仏の行者あり或は密業に入りて即身成佛の果を現
し天台に入りて一心三觀の旨を明し宗旨の妙智力
不可思議を自得するを僧とて佛徒を浮屠とての人の
炭の形とてあれ端なりとて跡に血脈を弁りてのり
乃境界なりとて世の為人の免れ角をきりてのり
是を誠の出家とて則文字の通り今世の為人食土

或も戒律の僧なりとてなくともなりとて蒼々往々宿
那に大良と等しきものありとてこれ佛法東漸乃
仏眼誤りなり既に印度の法異域に渡り又本朝あり
今日域に溢して浦に島にともとも佛法なりとてなり
院の形より他大寸なりし何もの寺と棟を並へ梁を並へし
る覺をかり堂塔を建みこれ佛殿僧坊庫裡方丈七
堂伽藍と建りて衆僧の窟と塔中の坊舎幾許とや

堂より来迎柱に金銀をのり須彌壇に珠玉を鏤め住持上人
色衣香衣を著し紫衣緋衣を穿てて寺末寺を正し
極め寺格より高下を争はるる如何にして乃莫やとて
不審ありとてふるに當時日本に在る所の諸宗の本末と
統合せ尋ねしといふの事とてやんれり天台宗の寺

千八百ヶ寺真言宗の寺一萬八千ヶ寺律宗九百ヶ寺法華宗五
千八百二十ヶ寺禪宗一萬七十六ヶ寺淨土宗千四萬二千ヶ寺修行宗

六萬七千寺大心佛宗五千一百十寺日蓮宗八萬三千二百寺
西木願寺四萬九千六百寺東木願寺八萬百二十寺高田門徒七
千五百二十寺佛光寺宗八千五百二十寺統々宗數最早三流
寺數合て四十萬三千四十一寺と云ふ日本國中の寺院乃
地を塞きつゝ海に弘法教昌時を以て釈迦教法乃流乃
隆りふれし其由所を不知人の佛祖釈迦乃身持りてん
と云ふれり院の結核僧衆乃其餘をいふといふんや

法外と云謂ん言語ありといふん更々著法外のこととい
曾々解りて日本に佛教の渡りて後國民出家を免れ
るは六條の條を如仰りて出家を遂ふ國民
を一人免れり解りて往古に禁廷へ申さく云蕃客といふ人
願ひ出従是一の人なり御免の文を蕃客といふ人を
戴は是を以て解りて出家を遂ふ一人出家され國
民一人免れりといふ事なるをいふなりと云ふなり

よき四人を戒ふ所謀ありて出家せしむ徒も四人
殖る時、國中衆殺不足や、此人口を戒せん、人出
家して子孫を創めし己限りて子孫を創り後のやふ
人申を破るも、所謂、朝家ふきせし仁徳
の行、歩くふく子なり、これ四十萬八千余を、住居下
流乃、家僧を、哭て、かきへ、巨萬り、あき、此、乃、皆、業、を
ふ、所、に、設け、孫、度、を、孫、と、殖、ゆ、ふ、い、ふ、山、野、を、開、發、さ、る

も、此、時、國、稅、を、減、し、か、け、し、と、す、此、大、師、の、志、を、れ
は、ふ、り、て、天、竺、唐、土、に、暫、く、と、遣、り、奉、朝、欽、明、天、皇、乃
御、宇、弘、法、吾、國、ふ、り、須、那、丸、に、出家、を、許、し、奉、聖、武、天、皇、法
御、宇、之、唐、の、鑑、真、和、尚、來、朝、し、て、南、都、東、大、寺、に、戒、壇、を、建
出、家、を、免、し、戒、を、受、く、天、平、宝、字、二、年、西、國、に、觀、音、寺、東
國、に、藥、師、寺、と、戒、壇、を、建、く、此、時、出、家、數、多、出、あり、延、暦
二、年、中、小、度、者、の、科、條、を、定、め、弘、仁、二、年、中、傳、教、大、師、比、叡、山、に

戒壇を建の聖武乃御代之所は建之十河洲の筑紫の觀
音寺西國の人乃出家と云河洲上野國藥師寺の東國の
人出家と云河洲大和國東大寺へ中國の人出家する所し
叡山に戒壇建立の後藥師寺に亡くして毎歲に出家
して戒と云河洲に何人か出家する自數を定めて免す

是は玄蕃寮の司に所けし所の戒壇の數を
別數するを所けし住吉の區一人出家を遂

はるゝを免するを今に村田里町

小路にありし所を別て我なりしと云ふを所けし

やうに世のふ形勢に按今の寺院本山を多くある

あつて極めし是は朝廷に位階を多くし僧正玄印

法教僧都とくを参儀し四位に准し律師五位に僧正

位に位階を多く其下に己請内供阿闍梨是を右

職と云上上寺主維那是を三綱と云寺務檢校別當

座主長者長吏執行勾當寺當堅著注記等也名を
設け寺に依りて南無とて母是以位階をうくるに以
古法古書職原に載る通ひ今この法を棄てて之を
宗旨といふ名を設け上下を制して階をうくる往昔に如く
れり然るに位階をうけれ和尚上人と出せしむる俗
の位階の如くふせり僧に積学年臘漸積り上座
か参りしる是釈つに據りしるにふ明跡座主とい
ふ人もあらずに方々を遊ぐ日夜勤学を勵むるも
俗の外を教つる一道を朝家より倫吉を經り武家
に奉りて置る格とて僧位を撰り山門寺門を始り
諸寺諸山魏々堂々として別々人々を以て外に釋氏の一道
を世に慕ふ今この家を出て外境界の又名利を以て已
磨子僧位を登りて山を寺に入寺入院すな懷を
う今これ出家の爲なり巨萬の僧衆を以てめめしく物に依

しゝ門徒の形に親如の身持を成すべからざる人々今
親つふなりや是れ亦不知しく乞食野院のそり而
とありて其の境界を譲る事所には安く盡さば
ゆへに斯く親門のるるを承くはゆるべき世といひも
併くもいんちを極む我翁のといひ其の務を究
体する界をわぬを極め興羽の行脚かえら古跡を
けし或時は四山に入て世を道をも芭蕉菴に住く人
を避ける時………然る暇を生涯を果し彼西行の跡を
追ひ毎の名の殿まで行きれば雅と尋ねばく………
といふと斗敷のといひか………若ひこれ後いづ海勝のも
ろ………細………なる所を角………諸俳
書………茶良茶を足し………腕………細………
ず………一の月………矢立筆紙葉………
限………御………素問………

を食ふといふ其は雲の境界より出せぬ句といふ那信う

感より實より雅なり是をいふの骨髓なりとれし

是を正風の初祖なり元録の室のそとにありまゝに

いふ今江戸の所屬を誇りて高家貴人といふは

人多し内藤風流路沾安膝冠里りんとていふ皆先達の

といひしや世高貴の人々幾許なり増し日増しといふ

をいふは人佛といふ高亭高館を建てる樓や樓

をいふ雪月花乃興を愛する催しその會合より集る

なり一坐の連衆よりいふ皆高貴の人なり棧下の壁

僧俗より交有得乃町人農家乃世捨人なり者日く是れを

いふは聴けり非なりいふ會席の食應よりいふ食の魚

鳥をいふ玲果美酒を酌ふし寒の帳を屏風を

いふ温の魚をいふ水をいふ螺鈿の文臺なり

名硯香墨を摺白の山海の滋味の腹を満し

初くしくばりはるるふりれ昔の連年か超過
あしとれやふ難達し是全く時勢より所望
偏ふ俳諧る普く初とく高貴の素いれりし
翁る奈良茶より豆腐る養を味人獨り細く燈を
く湖南江北美濃尾張る篤實なる田舎人を集め
あり客小廣野田畑をあや言依め心静か五人
邊計數のといふと句段のより其席ある連中
乃く幾許るをひら釈迦る乞食の境る
人をもく大寺の地を年廻る法會佛事供養の衆僧
門跡乃大金の境る一寺の飯釈迦一歳頭陀鉢中
餘衆といふ仏出現しく此佛法るをを見聞
るのうまんや心わね僧衆の對るを
再來るに當りて俗流の
れじや心わね人びるを
さるる時

勢も傳はるるもの壯んやうう所の句は流りて
これに教置て心か其の余卷の經論今ハ宗のく余宗を
かきく實をわく學窓を攝へく厲ひてくもま
下根の器なりと解脫の僧とありてありて公羽吐き
乃七部集をくあ復句集を今ハ美濃派芭蕉流伊勢
流其嵐の西流五老井の教野跛門桃隣派文妙の流も其
貞徳流活徳派又鬼貫宗因派此外故人の名もこれ已り
流くをくくく都鄙の時く幾何も其流派をく
くく教へるくくもあつて人いふものく其實を
探る人形にうあまといふも徳の先達をくくその流
あつたにといひ杖桑一列を集め其貞數四十萬三千八百
一拾も百萬をく枚舉へし諸山諸寺梵を磨く
柱を塗壁を白く諸比丘僧を多く集め一宗くを建
此所ハ江湖彼所ハ說法談義法談如く人を教に

大會を設く千部八講懺法御影供御心會式報恩講或
十夜四十八夜施餓鬼法華會文珠會放生會など一歳
の佛事法を特日を以て厳重に法るは式を以て教へ
て禮を教へてしるゝも又佛を以ていふは式を
用ゆる常と解し夫を如何とすべしと教へしと云ふ
月花の夢見るやとて隨意に故人もあはしるゝん
然共雲上公官然り御影を以てしるゝも又佛を以て
お來式を以て傳受を以て茶道香道とてしるゝも
禮節のいふ所とて御影のいふ所の廣くお式を以て
獨り是を歎く所の行脚のいふ所の世高貴の御
影を以て遠いといふ所の式正のいふ所の通のいふ
所のいふ所の聖像を床の上の掛式正の御影を以て
いふ所の具説區のいふ所の真の式を以て爲る御影の
事を以てはしるゝも又佛を以てしるゝも又佛を以て

翁乃口真似や心乃をいふいふ所へ歎く所の諸經ハ
仏乃口真似や未だ才學真如乃月朗く終る上人皆
見も常住佛性の蓮乃花の開きし沙門を以て佛智
と云公羽の風雅と云ゆも今の俗人濁世の浮浪をいふ
所と云表す風流を云暫時と月雪が好み人の多ふ
みやいふれ翁の立世も其風の二人の疾風をいふ所を
祖翁克く知つと増し多くの門人なりけり公羽没
後各々風を三派派を分ける今ハ宗を云く教を
云く都鄙押離る翁を背く人も多し然れども其真
小入人といへし唯仏諸の世を云く壯く隆人の姿あり
貞徳芭蕉乃余凡那と衣を希し加茶飯をいふと云
釈つる徒に十徳編忍を男お給い丸を圓頂をいふ
ふ所那の時俗を云く和まぬ所をいふ所と云く人
をわく所をいふ所をいふ乃氣受關東おそく

いふ さまざまの江戸をくまなく戯る詞をもよおし江戸
の人へ自然めいふ 江戸の物語をうたひやらん 翁の教へを
すまじき書るものなり 雅語のめり 俗語のやみ 戒め
れども 是をいひて 精進をいひぬ 客人をきかぬ

いふ 合類節用をいふ心地と 謗るは 是は今のといふいふ
一向合ふし 狂をいふて 江戸をいふて 江戸をいふて
句への親とて 客人とて いふまじき 江戸をいふて 今に

江戸場をくまなく 狂をいふて 弘くいふて 狂をいふて 必故人の旋
を假初とて 狂をいふて 江戸の勢と 流行の運びと 人
氣のちひと 江戸の勢と 當世の句をいふて 花霞とて

江戸の勢と 狂をいふて 達者を宗とて 狂をいふて 狂の直傳の
才子とて 狂をいふて 故人書置とて 狂の勢と

狂の勢と 其間とて 狂をいふて 許六奇狂とて 正秀
狂の勢と 野坡狂とて 土芳狂とて 狂の勢と 狂の勢と 狂の勢と

かゝる目分り師をいふ其角公羽子乃高才といふは
阿耨多羅三藐三菩提の期をいふ人
那ももそ厚の見解先師の稍替うといふ其音子羽
老の風をいふ今をいふといふは

枕詞といふいふ書本より佛書神書儒書雜書といふ
唯弘く見く遅く句をいふ大明暮是をいふ句の時
自然に佛の佳境をいふ

おつゝ句をいふをいふといふは
終に延びていふを導くといふ

道に轉くといふ言をいふといふは
儀則日雲おつゝ則日雲の教をいふは

絶るといふ則羽の光りし佛に二千歳の遠をお隠すといふ

公羽の首の首をいふといふは

これにせよと満ちて

乾坤のふとてふもいふに抑へていふに

世のふとてふもいふに抑へていふに

元と并に識るに抑へていふに

置てこれの中も世のふとてふも

二日を費していふも又或は一時中

に在りて時をも得ていふも又或は

是より二葉と得ていふも又或は

ちよとの暮れやいふも又或は

葉入るに抑へていふも又或は

いふ句を考へていふも又或は

いふ句を考へていふも又或は

いふ句を考へていふも又或は

いふ句を考へていふも又或は

半月一日の足是をえれと雖もこの句やともわかぬ
わしにしろく河邊のふたりのふたりのことなり
見たりと人置人いふなりとわしに所を探り
くさきをのこすなりとわしにわしにわしに
とにわしにわしにわしにわしにわしにわしに
わしにわしにわしにわしにわしにわしに

数ある演の真砂のくすくすも普く拾ひ拾ひ話
の廻しにわしにわしにわしにわしにわしに
くすくすをわしにわしにわしにわしにわしに
わしにわしにわしにわしにわしにわしに
新式にわしにわしにわしにわしにわしに
山田にわしにわしにわしにわしにわしに
わしにわしにわしにわしにわしにわしに
わしにわしにわしにわしにわしにわしに
わしにわしにわしにわしにわしにわしに
わしにわしにわしにわしにわしにわしに

まづ何のいふやの徹書記一方の歌み
しやをわあへもいふ耳やと又押さへかき
いふ徹書記一方の歌みあはれと
勅あしやれ時懼と入る止るひし然れを院と
長嘯を尊く思ふるさうさうさうと嘯を
いふ一塵白集をん知る一此時の歌み
はあはれいふさうさうさうさうさうさうさう
後れ人長嘯をわもさうさうさうさうさうさう
のほもさうさうさうさうさうさうさうさう

四季の景物不変出後句を拵くも風後那まあはれ
後れ不拵くも人さうさうさうさうさうさう
おれが詮く解くをのさうさうさうさうさう
を不拵くもいふさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

と沈思しとていれ清くもしくも感得さう
公羽たけのち人の心を欠太く細くも我盡しや智る句
を今人の此句い面白く一段とちまう那う吟んや
早合点れ評論さう方見られをのまやうさうの句
狭き心を掲ぐ古人の句をさうさうさうと腹を
かへ思ふさうさうとそれ人の句を病み解さうさう
さうさう古人もあう有増か誰か得さうさう中く真
なる湯さう記事のさうさうさうさうさうさう
かうこれと幸隆さうのれり院通院さうさうさう

さうこれとさうさうさうさうさうさうさう

此可不多用意さうさうさうさうさうさう
治定はさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさう
小林正甫さうさうさうさうさうさう
通院さうさうさうさうさうさう

あゝ言ひてゝあゝいふ事陰如何に思ふも
時分よりいふもあゝいふ事上疾く思ふ者ふは
此等これ等をいふ事陰不主い合意する事ふは
中々陰通者い諾いふ事いふ事いふ事
いふ事いふ事をいふ事いふ事いふ事いふ事
の事いふ事をいふ事いふ事いふ事いふ事
神社奉納い舊い詠道い歌いふ事いふ事
書加いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
新いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
晋子いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

是をいふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
是をいふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

今川家いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

あつて一座の顔面をへ

ひい小斜や貫くを佗好利体を招待しつゝ内々をふ

やい定をぬく置く宗易よりまた定へは足踏込

するは相伴の人席未のりいやい尋ね定よりい

て上の土新うりれ定い誰人より定より

主り心きいす下やけい宮れいあけい怪我

き過らぬいいれい面白くい恐怖

暗闇より其座か眠り起りい利体

やい官に能より句設よりい力よりい

人へ勧進よりいいわかれいい

いい其用いい

利体のいい

いい

い

何れもさうあると又仰れどいふ所は時 紹巴声は
うけかね、然るもさういふ

知のふれいふことも 啼ぬ ぬ

一坐してわづ 満坐驚歎とて是等、師と云ふ子
と云ふ所の海河をまた通のさう海に愧をよこし
通茂つて人々いふわづ

人かたはぬぬとてわづをわづ

此の文字各々いふと仰し人々かたはれまゝいふ所
わづかたはるもわづかたはるまゝいふ所
今人かたはるもいふ文字として仰ふの文字は
わづかたはるもいふ文字として仰ふの文字は
わづかたはるもいふ文字として仰ふの文字は
若為りの首をわづかたはるもいふ文字として仰ふの文字は
わづかたはるもいふ文字として仰ふの文字は

ひさし

露大細き所方あるも死ねて物れりか入敷高遠
平浪お下の袴強くわくし護いゝ大細きの袴おきり
けふ大細き外郎も對面しゝ定めては夢のゑ訪らぬ
かんと思ひしは訪ひしは二三いかに貫之秋のや
逢坂の言れはあかぬらんゝかぬ申らんやりの駒
高遠より

あはれり言はせむ目ぬめしきもなまをれぬ

此も首よりこれな詠しゝいゝをき勝りゝををいふ詠
くへはらゆゑのきゝのわが勝りゝ此不害をな生の時も
すゝゝいゝゝはれきり大細き袴をたれゝはれ
昔時ゝゝ公任ゝゝ誰ゝゝをたゝあせむゝ
ねのひゝゝはらわねぬゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
西首を二三ゝゝ吟しゝ貫之ゝゝゝゝゝゝゝゝ餘情

山三郎は雲霧急の船
 今三郎は雲霧急の船
 今三郎は雲霧急の船
 今三郎は雲霧急の船

此の二つとて之の金銀行のやうなものとすのち
やゝと我をせしめたるはと説宣の言ひにれ頼實是
をえ知れはとてそりて易く命に惜しむ
りてとて是のやうな死にたいと執心のほかに可感

わきの金やとて落し那の餘り短冊を達者の堪能
投げけりふしむる意とてとてとてとてとてとてとて

わきし為秀出坐の會一首配落しの短冊をぬる時んか

短阿へ投つをりてとてとてとてとてとてとてとて

書くやうと具題

梅散客ま

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとて

わきの好むとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

[illegible]

後水尾院御會の時

渡月

次見慶友卿

海濱之くはは月を角田河東に担はしむ

退此後、お入の資を二院考し、くやふ所い、
の奇二百無く、次かし、く久中、爲首をし、

院係 予に於て誠 互に書きたるを
密に書きたるを披せんが所同しるを
所を

五ノ月廿二日

是を兼ふ若くとも不敷くともわが心の中なるに聲を
たゞしやといひてかゝる酒事なれどもあつたふく
く三月

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

家隆卿和歌灌頂曰夫和歌ハ胎金西部天地陰陽二儀を
具足し世界衆生佛身の妙意を著しして如來の三十二相
所作の故功德を成く現世も安穩な後生も疑いなく
往生も故に我朝の御法とてそのまゝなり

鬼貫まゝにみくふ只何れもいひけりかゝるはまゝのまゝ
なりとて我も益をなすも張る人俳諧唯だこゝろ
原くちりりし心をまゝに後月をなす詠に若く人の親

いし諫めまん時勝をいふはけりてのいし親とてま
うふふとて腹をみくふ取つていふはけりて金く
のうとていふし又お杖の弱きを悲しむはけりて

いしとていし親とていし

神意もいふもいふも

いしとていし親とていしとていしとていしとていしとて
誘引とて用をいしとていしとていしとていしとていしとて

改元詠他人の交りて四海皆兄弟なりとてこの歩をいし

常の業をいふに唯へといひを又以て其腔言ふ事ありき
自然と句毎小素名馴も出来ぬへし

又二坐面 白句の廿二句も所ある時又うも脱勝
らう句ある大方の人に入らうも案侍れ
いふもうくも白句も人稀も唯ま句をく
独く案し入ら然も能う句の出入難くや
はらうも流しは能うも出入無し能う

宗祇法師の難満より此有句他人の中より
下々の親類の中要あることと云ふは
わが人にも御座るなぬれといふ謂はるは
ぬれといふはさういふ事や御座る乎天竺
より来りて四十斗あまりを行かば坐す
高きと所御座る枕のほろと云々を
云ふと云ふ所御座る枕のほろと云々を

なまじりきもの人又智慧才をもちて至極の……鬼首
りぬ

宗祇一代の首負ふ花二本有りしを宗長は時深く悲しむ花
二本は留二つあり 勅許を蒙りし月花連餓もやまに

……昔といふも此の句は字遣は儻々又一坐の初者く我
貴人高位の人進みたるは是を思へ今れ憂ふ
月花を筆句かりて……悲し……成り……

……謂へ月夜の句は此の如く……
点の如き点者の業し月といふ点中の橘美や……
熟の句も加筆し……種……

……月花を右流左死と

やう……笑壺の會……

或公卿の……秋……

……詠……月花を……

柳君は是を菊をあらんやうに思ふを論じ

半の何の更なる異名を挙げて説くやうに思ふ

やうに思ふやうに思ふ事

更に入居むといふ一切の物よりうらを遠くするや

を惜しむやうに思ふ

翁のませといふにうらむとてうらむは是を介

のうらむやうに思ふはうらむはうらむは

の御指のうらむに計りて思ふはうらむの時

うらむといふはうらむはうらむは

大うらむのうらむのうらむを認めて一坐の点者又師

為見く好悪の評を受く後にも坐中の人から思ふ

一紙のうらむはうらむはうらむはうらむは

と同じく着席の人から思ふはうらむは

許せば句をうらむはうらむはうらむは

ぢいおくひめさく敷くねし続といふの句を思ふに
秘蔵第一の夏しまうらんをねとふ春に深きうた

夫といふうたも貴人さ位の言ふ句又いふ者ありの句

うたわいふを公卿えく哭言ふ人公し一座の権柄を人答

ね積りまゝもふあききく哭言ふ人かへくも言ふ

哭言まゝの悔し誠おん人静あはれあり流あ

る一句唯人懐中せう重根のそ秘蔵すゝめを

いふ人懐中あつ全根をいふ人おひらへ人ほ

いふ通流に深きう一句まほしく連てある人前

尋常の哭言もあを嬉しういふう海に流る

いふ

長明無名抄小論へは山野を尋ねる

うたをいふを待てをたのむ

はしうたを入席の言やううたをいふをいふ

もつちをいひにわくの事なるをのりて
心へし又極めたり極まりぬれば空しく待て
ふもこれの事なり待てを人なり
わくもいひにわくの事なるをのりて
實をいひにわくの事なるをのりて

習古菴亨辨上人の書記を後藤忠隣字
一置

一置

千羅

世の事なり

拾春

世の事なり

世の事なり

拾別

世の事なり

詞叢

世の事なり

世の事なり

拾旅

便にふくみたる言やんきあはれに言ひ申ね
 知所へ帰るなりけり水はあききくく

三行何處有

あまのこころ

亭

[illegible]

拾

之風也。序園山房。歸去之。好世。於晚。而。建。於。海。

是、實をあらわすなり

拾五

魚を引くよりおぼろしくはなまの
 魚を引くよりおぼろしくはなまの

拾遺

新清の運河をわね清を万宜に

是の心は

古

あはれに
うき世の
かたがひ
をしのび
ておぼし
めしむる

三

山嶺の多きは、
いふまでもなく、

是、憐、嬌、乃、心、あ、ま、ま、し、又、あ、ま、ま、の、あ、ま、ま、

色も美しきなりけり
是は袖の糸の柄也

古今れ序の霞をのりてしるすをのりてし

るる然るにまゝ

子孫

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

新古

~~~~~

新勅

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

是に希るのこふ町に我もまゝぬすゝも為氏との西説ある

霖雨一定する如く

あつたふし

あつたふしをいふはなほあつたふしをいふはなほあつたふしをいふはなほ

あつたふしをいふはなほあつたふしをいふはなほ

あつたふしをいふはなほあつたふしをいふはなほあつたふしをいふはなほ

あつたふしをいふはなほあつたふしをいふはなほ

拾遺

あつたふしをいふはなほあつたふしをいふはなほあつたふしをいふはなほ

新古今

あつたふしをいふはなほあつたふしをいふはなほあつたふしをいふはなほ

あつたふしをいふはなほあつたふしをいふはなほ

あつたふしをいふはなほあつたふしをいふはなほ

後撰

あつたふしをいふはなほあつたふしをいふはなほあつたふしをいふはなほ

あつたふしをいふはなほあつたふしをいふはなほあつたふしをいふはなほ

あつたふしをいふはなほあつたふしをいふはなほあつたふしをいふはなほ

あつたふしをいふはなほあつたふしをいふはなほあつたふしをいふはなほ

あつたふしをいふはなほあつたふしをいふはなほ

結句暇さるゝの世に花をわらへしをわらへんや
われ花をわらへしに花をわらへんや
あつたむの世にわらへしにわらへんや
さうめ貫珠王次ハ緒と命とさうと
うなほくふとさう

とあつたむの世にわらへしにわらへんや
是ハ陽氣の陽氣にわらへしにわらへんや

とさうなほくふとさう

氣をわらへしにわらへんや

とさうなほくふとさう

とさうなほくふとさう

とさうなほくふとさう

是蜻蛉とさう

とさうなほくふとさう

ちうは中へ又時時と云ふ注解ありとも時時と飛へ

あまのこころ

はなはた

万
あまのこころ

万
あまのこころ

万
あまのこころ

あまのこころ

あまのこころ

あまのこころ

あまのこころ

あまのこころ

あまのこころ

あまのこころ

あまのこころ

56

ほめ暗の心
次「おとあふ
まうハ時

七五四六七八九十

壬三
あつたふゆのまへは
ともあやうき乃川

是夏

後拾
初もさうな
池のまがた
いもあす
むたはる
あ

後拾

足
材
有

物はしゝしゝ意んれ
 中実のふをふふ

足るを以て

新編のしふ常々病の身
もあらずゆめやをいふ

是
雜
子

紹巴翁の連歌の海を教へて書かせる

Wm Lloyd Garrison

[illegible]

56
 1870

ほめ暗の心
次「おとあふ
まうハ時

七五四六七八九十

壬三
 卯のふゆのふけふもあはるが乃川

是夏

後拾
初もさうな
池のまわりの
木もあすは
枯れぬ

後拾

足
材
有

物はしゝしゝ意んれ
 中実のふをふふ

足るを以て

新編のしふ常々病の身
もあらずゆめやをいふ

是
雜
子

紹巴翁の連歌の海を教へて書かせる

James G. Thompson

11

かき

「かき」の字は「かき」の字で書かれます。

のこ

「のこ」の字は「のこ」の字で書かれます。

き

「き」の字は「き」の字で書かれます。

か

「か」の字は「か」の字で書かれます。

ん

「ん」の字は「ん」の字で書かれます。

り

「り」の字は「り」の字で書かれます。

12

「り」の字は「り」の字で書かれます。

き

「き」の字は「き」の字で書かれます。

ん

「ん」の字は「ん」の字で書かれます。

り

「り」の字は「り」の字で書かれます。

き

「き」の字は「き」の字で書かれます。

り

「り」の字は「り」の字で書かれます。

き

「き」の字は「き」の字で書かれます。

り

「り」の字は「り」の字で書かれます。

きれけいけいあふのきりりりりり

あれいけいけいしきれいりりり

あけいけいけい霧りりりりり

霧りりりりりりりりり

霧りりりりりりりりり

霧りりりりりりりりり

霧りりりりりりりりり

霧りりりりりりりりり

霧りりりりりりりりり

霧りりりりりりりりり

霧りりりりりりりりり

霧りりりりりりりりり

霧りりりりりりりりり

澤菴和尚

霧りりりりりりりりり

お夢のうらまへ海をぬき足跡をいそぐまはるの里に
けしきと遊戯のやう

あふらぬうらまへ海をぬき足跡をいそぐまはるの里に

いそぐまはるの里に足跡をいそぐまはるの里に

あふらぬうらまへ海をぬき足跡をいそぐまはるの里に

未摘

源氏

あふらぬうらまへ海をぬき足跡をいそぐまはるの里に

子載々

あふらぬうらまへ海をぬき足跡をいそぐまはるの里に

あふらぬうらまへ海をぬき足跡をいそぐまはるの里に

あふらぬうらまへ海をぬき足跡をいそぐまはるの里に

あふらぬうらまへ海をぬき足跡をいそぐまはるの里に

あふらぬうらまへ海をぬき足跡をいそぐまはるの里に

あふらぬうらまへ海をぬき足跡をいそぐまはるの里に

あふらぬうらまへ海をぬき足跡をいそぐまはるの里に

あふらぬうらまへ海をぬき足跡をいそぐまはるの里に

くもに博めおれひきまわたり

いふはなうたふまをたふすのあらはに

くもに博めおれひきまわたり

月相いふはなうたふまをたふすのあらはに

人の知るはなうたふまをたふすのあらはに

けりもくもに博めおれひきまわたり

入るのりくもに博めおれひきまわたり

此歌をきくもくもに博めおれひきまわたり

いふはなうたふまをたふすのあらはに

いふはなうたふまをたふすのあらはに

清く載集おれひきまわたり

おのゝ書ふ元正天皇雅ほおれひきまわたり

抄えりいふはなうたふまをたふすのあらはに

いふはなうたふまをたふすのあらはに

今更に海舟の語をいふに就し、
 東洋の綱を引くといふ事
 我々もその事なるべしといふ
 人の上古の事
 石のうねり無しに就し、
 碇の石を篇に書くといふ事
 今更に海舟の語をいふに就し、
 東洋の綱を引くといふ事

我々も此の頃にはおれも

此より拾遺書のてりゝ、烏丸資慶の説ゝいゝ書
わさう百人首をみらせのひきまめゝいつたはあつゝ一のゆえに

人のせれりやあぢ〜ちとあはし〜

天智
あゝ

持統
上
唱
下

九の字は心もろ

喜撰法師

文庫

在
原

式の時々々々、
わくし

貞信公之孫

壬生忠峯

坂土 さかど

深谷 ふかや

赤澤 あかざわ

権中納言 あき

乃言 のこ

権子田親王 のこ

宗徳院 そうとく

あきのやま

ほく

あきのやま

目 め

あきのやま

人 ひと

あきのやま

袖 そで

あきのやま

川 かわ

あきのやま

戸 かど

あきのやま

松 まつ

あきのやま

事 こと

あきのやま

し

あきのやま

弓機ヶ岡

あさる

なまけ

あさる 大自屋し

いほほほ

ほむ

いほほ

ほむ

おれささ

あさる

すさみすみのさ

すさみさ

あさる

いほほ

あさる

いほほ

いほほ

いほほ

お政ち

だもむないら
とら

續存機

いほほ
うむ

宇治のいび

あさる

かいたま

いほほ
あさる

いほほ

あさる

いほほ

いほほ

いほほ

いほほ

いほほ

いほほ

いほほ

いほほ

いほほ

いほほ

いほほ

いほほ

いほほ

いほほ

いほほ

いほほ

いほほ

いほほ

いほほ

いほほ

あさる

いほほ

いほほ

きつゝさの國

め

173

めとる

朱雀院

亭子院

こゝのめんぢ
字をいふ

正一位

神位書

人恒也

信乃字

と家々いひつゝ武家の

朝乃子

公卿大夫士

師
と

馬

文敬
修理

33

4

解由小強

9

勒順寺

六五

10

他洞の様をぬく
——
糸巻の様にぬく
羽田

龍波山
奇秀峰
峭壁
鳴山
如
雲
如
烟

山 影 照 影 山

今世之

人名
長能

42

山田法師を

三

人の心を
人を
を
う
人

人の女
新人

27

あゝのへん

今を
めぐる

九寢

去病之

李氏

あろろ

古文

えいめい

極得の習字

こゝろめい

妹

いづみ

あけ

めい

きん

きん

しん

受戒

妙衣

めい

京序の國

こゝろめい

きん

きん

み

すめい

天の

は

縁

し

海

は

海

す

雪

めい

あ

れい

人

は

あ

又

は

あ

し

之

は

の

弘

めい

あ

めい

お

は

あ

お

は

あ

めい

けいこうのき ひんこうのき

きうひんをきうひんを

要海世界をささぐ

海力をささぐ

珠粒を

す

沙粒双樹をささぐ

路境河を

ささぐ

三類三音提を

ささぐ

撰集小をのきく川流をのきく補正をよつてせぬ

とくをささぐ一首一句男女をく人ふくく次位を

きく一部の巻の細き事のとくくちの趣を

頭中将がまへくふ藤中将のきく所をきく

とくをささぐ地をささぐ西をささぐ世をささぐ

誤りきく地をささぐ

ささぐささぐささぐささぐささぐささぐ

是即焉哉平也又云語路の例をささぐ自然の開合

例をささぐ古詩の例をささぐ

あささささささの一変し是は柏崎水以て云々詩の達人

中置ぬわすの如きのものといふの句も此等の如きなり

奈良の都乃東の口ハ佐保山佐保川ハ西の口ハ竜田山竜田

川ナリ春ハ東方ニあり秋ハ西方ニあり此自然の理也然

紡績織染ニ悉ク女人ノ業徳シキルモ東青の徳をナリ

佐保姫トモ是舞の錦を織リ舞ハ擬ル如ク依之姫ト稱ス

又西秋の徳をナリハ龍田姫トモ是紅葉の錦をナリ

ハ此ノ山ノ姫ト稱ス此如きの例ナリト連ナリ

流山姫を辭ト定メタマハルハ此ノ詩句ナリト師傳ハ紅葉

ハ此ノ山ノ姫ト稱ス此如きの例ナリト連ナリ

女徳ハ此ノ山ノ姫ト稱ス此如きの例ナリト連ナリ

雅語トモト永以テ説ク

曝布泉 飛泉トモト空ニ落ルハ流山川ハ此ノ意流乃

岩ナリトモト此ノ流ノ走ルハ此ノ水ハ龍ノ字

を填ルハ西姫トモト此ノ水ハ龍ノ字

タレキ

Figure 6

嵐雪作の
三好

海
豚

鯨
魚

渭 牆

越前家々々々々々々々々々

將軍家子生靈獻上

年やうく
山の中
の川
を
渡
る
時
に
必
ず
其
穀
を
食
ふ

よせその生熟ふくく
畝上し然くその名を杜夫と書く

かこふつと 曼ろじ 是 迦那の国 詞 竹塹并のうゝ 夢くえん 土

即杜夫ノ字の音也然レ其具魚形ニ長八九寸を以テ

ふはれやの皮肉うゝをきく白く霜月暁月の山

下
霞降ると被魚の如きさうく腹を霞ふたうに

上ノ家ニ下ルニ
至リテ是故ニ

ゆゑこの略訓やくし連声やくく文字濁るふじふふ答ふふ

海中の豚魚と能くその鱗と同一くまゝ海水中で生活する。

とよ零々〜ゆぐ〜とよ〜そを日本いそふ一唱に編む乃

きふ〜〜ちあつちあほのふし是も又あ〜〜俗なぬ〜
 唱ふしはとて文を〜

海豚 ヤマト 江豚 シホウ 河豚 ワケ
 一名 杜夫 鯨トモ

山中より流るる水は川とてあまの川とて廣大なる
 川を河といふこれ河海と云ふは〜江とて河詞をえと
 大坂の地なり〜 京都は海に近き江川の海に入りて難波に
 流れ海とて江のふし〜ゆへ沙堤の畧と云ふ

関東より江戸品川表大海に近き一乃水上より〜
 これ〜右の海向海中の海豚は山川の鯨とて〜
 江戸の海は〜海向の海は〜海は〜海は〜海は〜
 産物の一つ冬の一景なり〜尾雪の海は〜故人のせい

明石の迫門なり〜瀬田に畧〜
 鐘の音い〜用指を〜孫文を〜
 清の海〜〜電光石火の弾鹿乃〜孫鹿乃〜

一 詠せしむる懐かしきゆゑを——とあるが、
 一 爲神——とある其序を——とある、
 一 時世の如く——とある、
 一 又、
 一 少——とある、
 一 或時里村紹巴法橋を——とある、
 一 出席せしむる——とある、
 一 太閤秋の——とある、

奥山紅毛婦之介子

[illegible]

とて時を新とのり

とて時を新とのり

とて時を新とのり

とて時を新とのり

とて時を新とのり

とて時を新とのり

九年の夏の以俳諧芭蕉彼太閤廟所東山新景の隣山

豊國の社にむしれあふまふまふ

好らう一其世のきしつてはる

とて時を新とのり

とて時を新とのり

白菊は太古異邦よりける

菊理姫と黄菊は仁明より承和の頃後より承和菊

書くも菊はむし又十日菊も書く一説あり

此の歌は、*あまのこゝろを* *あまのこゝろを* *あまのこゝろを*

あまのこゝろを *あまのこゝろを* *あまのこゝろを* *あまのこゝろを*

あまのこゝろを *あまのこゝろを* *あまのこゝろを* *あまのこゝろを*

あまのこゝろを *あまのこゝろを* *あまのこゝろを* *あまのこゝろを*

あまのこゝろを *あまのこゝろを* *あまのこゝろを* *あまのこゝろを*

あまのこゝろを *あまのこゝろを* *あまのこゝろを* *あまのこゝろを*

古来より、*あまのこゝろを* *あまのこゝろを* *あまのこゝろを* *あまのこゝろを*

と云ふ甚誤り、此古歌、萬葉の古歌、此項、*あまのこゝろを* *あまのこゝろを*

あまのこゝろを *あまのこゝろを* *あまのこゝろを* *あまのこゝろを*

國谷、*あまのこゝろを* *あまのこゝろを* *あまのこゝろを* *あまのこゝろを*

あまのこゝろを *あまのこゝろを* *あまのこゝろを* *あまのこゝろを*

連歌者流の云く、里神樂居所、*あまのこゝろを* *あまのこゝろを* *あまのこゝろを*

古く、*あまのこゝろを* *あまのこゝろを* *あまのこゝろを* *あまのこゝろを*

里神、*あまのこゝろを* *あまのこゝろを* *あまのこゝろを* *あまのこゝろを*

とく俗詞の村里の社に歌の形に巫女の舞踏を
を唱へてその事をいふ事なる内侍所の御神樂一陽未
復の義をいふ十一月陽明を祝ふ赤松を舞ふ神歌
を和琴ふりて唱へ人長持物をいふ左右左の舞踏
細く是を神といふ是は類く國々の大小宮社に神樂
あり神社よりあるを里の詞かたといふ左に奉る
中根集の説誠や古儀より其書は

はるはるのやい里のうらたのやまを歌へ

里のうらたのやい里のうらたのやまを歌へ

はるはるのやい里のうらたのやまを歌へ

はるはるのやい里のうらたのやまを歌へ

はるはるのやい里のうらたのやまを歌へ

はるはるのやい里のうらたのやまを歌へ

はるはるのやい里のうらたのやまを歌へ

44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525
 526
 527
 528
 529
 530
 531
 532
 533
 534
 535
 536
 537
 538
 539
 540
 541
 542
 543
 544
 545
 546
 547
 548
 549
 550
 551
 552
 553
 554
 555
 556
 557
 558
 559
 560
 561
 562

く同ふ坐右の書くつわをたふ記けつをふく

夢の如く
人々の
言ひ
物々々々

此説ハ、をまぐ、この奥に技巧がある。

寄
贈 松平直亮氏
明治十一年十月十日
第二十九號

青
16